

## 逃れる道を備えていくくださる主に信頼しつつ

## コリントの信徒への手紙 I 10 章 13 節

学院長・宗教総主事 嶋田順好

創立 134 周年目を迎えた主の年 2020 年は、宮城学院にとって文字通り新型コロナウイルス感染症という全く予想もしていなかった試練に直面することとなりました。感染症ということでは中世のヨーロッパ社会を恐怖のどん底に突き落としたペスト、19 世紀から 20 世紀にかけて大流行したコレラ、さらには、20 世紀初頭に 4 億人が感染したと言われるスペイン風邪のことが脳裏に浮かんできます。21 世紀に入ってからコロナウイルスを原因とする重症呼吸器症候群（SARS）や中東呼吸器症候群（MARS）が、局地的に流行しましたが、幸い日本まで感染が広がることはありませんでした。それだけにわが国ではウイルス感染症そのものの脅威に対する備えが十分になされていないなか、虚を突かれるように今回の事態を迎えるに至り、政府の対応も後手後手に回ったというのが現実ではないでしょうか。改めて「災害は忘れたころにやってくる」ということを身に沁みて思い知らされたことです。

この新型コロナウイルスの正体が全くつかめないなか、コロナ禍は、武漢から一気にヨーロッパに飛び火し、イタリアに続いてスペインでも感染者が増え続け、フランス、イギリス、ドイツへとあっと言う間に拡大していきました。WHO が 3 月 11 日にパンデミック宣言するなか、各地で医療崩壊が起り、町や地域やついに国全体がロックダウン状態へと至らされていく様子を知らされた時には世界はどうなるのかとの不安を抱かされたことでした。

ことにいつもはビジネスに勤しむ人がせわしく行きかい、観光客であふれているはずのミラノ、ベネチア、マドリッド、パリが、人通りも絶え、生活の息吹を全く感じさせない静寂の都市と化し、あたかもジョルジョ・デ・キリコが描く形而上絵画の世界がそのままに現出したかのような不気味さを感じさせられたことです。この試練は、大嵐と呼ぶよりは、完全無風の風がもたらす恐ろしさとも言えばよいのでしょうか。一切の学びの生活、働く生活、文化的な生活、すなわち人と人との交流が休止させられ、凍結させられ、皆が息をひそめて生活することを余儀なくさせられたのです。

ジョンズ・ホプキンス大学が発表する統計によれば、今朝の段階でついに感染者数は 3000 万人に至り、死者も 100 万人に達しようとしています。もちろん、多くの途上国では、貧しさ故に医療機関にかかることもなく放置され、行き倒れのようにして息絶えた方々も少なからずいることを思えば、この統計の数値の正確さにも一定の留保が求められでしょう。実際にはこの数値より多くのコロナ禍による感染者、死者がいるであろうことは否めません。

東日本大震災による大津波とそれに連動して生じたレベル 7 と言える歴史上最悪の原発事故の時には、もはやこれ以上の大きな災害は起りえないのではないかとの思いにさえ捉えられたことでした。もちろん、災害の軽重や大小を単純に疫学的に表現することには危うさが伴います。被災された方の現実、それぞれに個別的であり、具体的であり、その大いなる痛みを伴う過酷で悲惨な経験を単純に抽象化して数値の多寡で表すことはできないからです。

そのことを十分に弁えつつも、やはり今回の新型コロナウイルス感染症がもたらした災

害は、政治的にも、経済的にも、社会的にも、文化的にも、これまでのあらゆる災害を超えた異次元の災害と言わざるを得ません。というのも、このコロナ禍は中国武漢での封じ込めに失敗し、あっという間にパンデミック化し、世界中に感染が広がることにより、77 億人と言われる地球上のすべての人々が例外なく巻き込まれる災害になってしまったからです。その意味においてこれまでの長い人類の歴史を貫いて、まぎれもなく最大の災害であることは否定できない事実ではないでしょうか。

当初は杳としてつかめなかった新型コロナウイルス感染症でしたが、ほぼ 9 か月にわたる経過の中で、その特徴も大分見えてきたところがあります。あらためてその正体を知らされれば知らされるほど、生命体ではないにもかかわらず、このウイルスが、狡猾な詐欺師のように、いかにも抜け目なく、いかにもしたたか、いかにも手ごわい相手と思わずにはられません。このウイルスは、あたかも真綿で首をしめるように生かさず殺さずの状態に私たちをたくみに追い込んで苦しめ続けるからです。

なるほどと思われたことは、エボラ・ウイルスのように致死率が高いと、感染者が死亡することによってウイルスも死滅し、感染が広がりにくくなるという事実です。しかし、今回の新型コロナは致死率もそれほど高くなく、無症状感染者が大勢いることにより、かえって感染拡大がすごい勢いで進展することになるのです。それとともに重症化する人の割合は、圧倒的に高齢者や基礎疾患を抱えている方々に偏っており、若い世代の多くは感染しても軽症か、無症状ですんでしまいます。にもかかわらず、無症状ということで油断していると、時に免疫の暴走としてのサイトカインストームが発症し、若い人でも短時間で死に至るということさえあるのです。その限りまことに油断のならない病であるに違いありません。確かなことは安全なワクチンと治療薬が開発されるまで、私たちは with corona の時代を、楽観も悲観もせず、忍耐強く、望みをもって歩いていくことが求められているという事実です。

ところで宮城学院のスクール・モットーは「神を畏れ、隣人を愛する」ということですが、この隣人愛の基本は「では、わたしの隣人とはだれですか」(ルカ 10 : 29) と思ひめぐねながら、自分にふさわしい隣人を見出そうとすることではありません。事実、苦しみ助けを求める人がいたらその人の「隣人になる」(ルカ 10 : 36) ということにあります。しかしながらコロナ禍ではこの主イエスが説く隣人愛を単純に実行することが困難になってしまいました。

3 月 18 日にメルケル首相がドイツ国民に向かってテレビを通して語り掛けた演説は世界の多くの人々の心を揺さぶる素晴らしいものでした。そのなかで「困難な時期であるからこそ、大切な人の側にいたいと願うものです。私たちにとって、相手を慈しむ行為は、身体的な距離の近さや触れ合いを伴うものです。しかし残念ながら現状では、その逆こそが正しい選択なのです。今は、距離を置くことが唯一、思いやりなのだということ、本当に全員が理解しなければなりません」と説いた一節が、ことに私の心に深く刻まれたことでした。

難しい言葉を一言も用いず、これほど深く分かりやすくコロナ禍における人と人との身体的、物理的な関わりの基本を説いた表現を私は知りません。まさにコロナ禍での隣人愛の実践(思いやり)には「距離を置くこと」が求められるのです。そこには隣人愛の逆説が生じていると言えるでしょう。そのような現実を受け入れることを私たちに強いるということにおいて、この度のコロナ禍は、極めて過酷にして悲劇的な災いと言えるのではないのでしょうか。

そのことを思いめぐらすにつけ、「神を畏れ、隣人を愛する」ことをスクール・モットーに掲げる教育研究共同体である宮城学院に連なる者たちには、適切な距離を取りつつ新しい生活様式に即した「共に生きる」道を如何にしたら見出すことができるのかという新しい挑戦的な課題を、突き付けられているということではないでしょうか。言い換えれば、身体的には距離を置きつつも、心の交わり、心の距離を縮めるにはどうしたらよいのかという課題が突き付けられているということだと思ふのです。

政府も、自治体も初期の緊急対応から「with コロナ」の段階に入り、緊急事態宣言を容易には出さず、また出せなくなりつつあります。感染症がもたらすリスクと経済活動が停止することでもたらされるリスクを十分に衡量しつつ、如何に健康と命を守りつつ私たちの日常生活を動かしていくのかというぎりぎりの決断を迫られるからです。それはまた宮城学院のこども園、中高、大学、法人にとっても同じことが言えるのではないのでしょうか。すでにこども園、中高は、ほぼ通常の授業が展開されています。言い換えれば、日々、適切な距離を置きつつ、新しい生活様式に即した共に生きる道を模索し続ける歩みが始められているということでしょう。そして大学も後期からは、多くの講義が対面へと変えられることになっています。もちろん、その取り組みに絶対の回答はありません。主なる神の導きに信頼しつつ、人間のなしえる限りの最善を求めて時々刻々決断していかざるを得ないので

す。

ところで、さきほどお読みいただいたコリントの信徒への手紙Ⅰ 10章13節には使徒パウロの次のような言葉が記されていました。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずですが。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」

コロナ禍は、すべての園児、生徒、学生、院生、教職員に、厳しい試練となりました。しかしながら確かにそれは「人間として耐えられないようなもの」ではなかったのではないのでしょうか。あらためてこの試練が10年前に生起し、東日本大震災とほぼ同時に襲来していたらどうなっていたことかと思ふます。また、ほんの5年前だったとしても、その段階で宮城学院の中高にしる、大学にしる、こんなにもスムーズに遠隔授業や遠隔講義に移行することができたのでしょうか。多分、ハードの面においても、ソフトの面においてもそれは殆ど不可能であったに違いないのです。その限りまさに旧約聖書コヘレトの言葉3章1節に「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある」と告げられているように、不思議にも時満ちてこの試練が私たちに与えられたと思えてなりません。

その結果、多くの教職員が、これまで等閑に付していたICT教育に否応もなく取り組まなければならない環境に直面し、大変な労苦を担いつつも対面授業だけでは知りえなかったオンライン授業の豊かな可能性、長所も理解し、実感し、対面とオンライン、それぞれの長所をハイブリッドしながら、これからは今までよりもはるかに豊かな教育を展開しえるステージへと引き上げられる経験もさせられたということではないのでしょうか。その意味において、使徒パウロがローマの信徒への手紙8章28節で「御計画によって召された者には万事が益となるように共に働く」と告げているように、まさにこの危機が好機となり、新しい飛躍のためのチャンスにつながったのではないか思われてなりません。

それと共に大学の先生方とお話すると、前期にはオンライン授業の内容を新たに考え

ながら、学生から返されてくる膨大なレポートの添削に追われ、大変厳しい日々を過ごされたことがよく理解できます。しかも学生の皆さんのレポートを読んでいると、これまで対面で講義をしているときよりもはるかに真剣に、濃密な学びをしている学生が多いように思うとの感想を漏らす先生もおられました。

きっと学生の皆さん、ことに新入生の皆さんは、コロナ禍という危機のなかで緊張感と集中力をもってオンラインやオンデマンドの講義に取り組んだのでしょう。そのような学生の皆さんが、後期には期待に胸を膨らませながら満を持してキャンパスに集い、待ちに待った対面での講義を受け、先生方や友人たちと出会う機会を備えられるのです。そうであれば後期の対面講義や学生生活もいつものとおりのいつもの年度とは一口も二口も異なる感動や充実した雰囲気のもとに学びが展開されることになるのではないのでしょうか。なぜなら、当たり前前の日常が当たり前ではなく、文字通り有難きこと、感謝すべきことという気づきを持った学生たちが対面講義を聞き入ることになるからです。必ずや学生の皆さんは渴いた砂地が水を吸い込むように真剣に講義に聴き入ってくれることでしょう。

興味深いことにコリントの信徒への手紙Ⅰ 10章13節には「あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」と記されていました。ここでは試練と闘えとか、試練を克服しろということは書かれていないのです。逃れる、逃げるというモチーフがはっきりと出てきています。大学の入学式で末光学長が、星野富弘さんの小学生時代の思い出をお話くださいました。星野少年が、渡良瀬川の急流に呑み込まれた時、流れに抗して元の場所に必死に戻ろうとしても全く歯が立たなかったけれど、考えを変えて流れに身を委ねたら急に流れは穏やかになり、浅瀬に無事着くことができたという話です。それはまたコリントの信徒への手紙Ⅰ10章13節が伝える信仰の姿勢とも相通じているのではないのでしょうか。すなわち、私たちはコロナ禍という流れに悪戯に抗い、コロナ以前の状況に戻ろうとあがくことなく、「蛇のように賢く、鳩のように素直」(マタイ10章16節)になってWithコロナのもとで巧みに流れに身を委ねつつ、新しい浅瀬を目指して泳いでいく者でありたいと願うものです。

しかし、さらにこのみ言葉との関連で心に留めたいことは、この御言葉の前後の文脈では明瞭に偶像に仕え、呑み込まれるようなことがあってはならないとの強い警告が発せられていることです。となれば、いかに狡猾な手ごわい相手だとしても、私たちは新型コロナウイルスを神ならざる神のように必要以上に怖じ恐れ、屈服してはならないということでもあるのです。

多分、秋から冬にかけて、安全有効なワクチンも新薬の開発も間に合うことはないでしょう。そのようななかで私たちは新型コロナウイルスとのみならずインフルエンザとも対峙しなければなりません。それだけにこの秋から冬にかけての時期が、一番厳しい試練の時となることは間違いないことでしょう。そこでこそ私たちは、神様の真実に信頼し、園児、生徒、学生、院生、教職員が、「隣人を自分のように愛する」とのイエス様の御言葉を深く心に留め、自らを愛し、隣人を愛するが故に、わずらわしきや面倒臭さを克服し、ことごとに手を洗い、しっかりとマスクを着用し、三密を回避するという新しい生活習慣を責任的に担いつつ、しっかりとしたたかにコロナから逃れることができる学び舎であり続けたいと願わずにはられません。

## 祈祷

恵みと慈しみに富み給う主イエス・キリストの父なる御神 あなたの御名を崇めます。

創立 134 周年の記念礼拝は、コロナ禍で迎えることになりました。私たちはこの時あなたが「わたしたちを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくだ」さる主であることに信頼し、よくこの試練から逃れることができるように導いてください。

こども園、中高、大学と次第に元通りの営みを回復しつつありますが、独り独りが倦むことなく怠ることなく新しい生活様式を堅持することが、今このとき最もよく隣人を愛し、自分を愛することにつながることを深く自覚するものとならせてください。

ことにこの場に集うことができなかつた同窓生のことを覚えて祈ります。同窓会にはご高齢の方々が大勢集ってくださっているだけに、ホームカミングディも、全国支部長会も、支部総会も開催できないなかにあります。それだけに全国に散らされている同窓生の皆さんを、それぞれの場であなたが確かな御手をもって守りお支えください。

また 20 年、30 年と宮城学院のために献身的につかえ、この日永年勤続表彰される方々を豊かに祝し、ますますよき働きをなすことができるよう導いてください。

この祈りを宮城学院のまことの創立者である主イエス・キリストの御名を通してみ前におささげいたします。 アーメン